

『聖書』における「義」と「信仰」とは

94K053 込 尾 剛

序章	はじめに
第1章	「義」とは
第2章	「信仰」とは
第3章	「義」と「信仰」の接点（総括）
第4章	現代における「義」と「信仰」—多種多様な現代のなかで—
終章	おわりに
註	
参考文献表	

序章 はじめに

「義」とは何か、「信仰」とは何か、これら二つの概念を考える場合、大きく分類すると、二つのカテゴリーに分けられると考える。それは、「義」、「信仰」それぞれの定義も大切なのはもちろんだが、それに加えて、それぞれの関係がどう結びついているのか、あるいはそれらは結びつかず、独立したものなのかどうかということである。

また、「義」と「信仰」というこれらを論じていく過程において私の場合、あくまで、『聖書』を基本とすることにする。従って、本論文の参考文献は、『聖書』を中心に扱うということをも最初に断っておこうと思う。

私は、文化論演習Ⅱを通して『聖書』を基本として学んできたわけだが、これらは、主に広い意味において学問的にキリスト教やイスラエルの世界を学んだ。あるいは、これらにおける史実性についても学んだ。

しかし、「義」や「信仰」などという概念は、キリスト教には当然のように存在しながら、実は今一つ実態が掴めていないように私には感じられるのである。いわゆる、未知なる世界なのである。ちなみに私はクリスチャンではないのだが、そういう私が調べてみるのも面白いのではないだろうか。

このように考えると、これらの概念はある意味でいろいろな答えの導き方があると思われる。つまり、これらは考える人それぞれが異なればそれぞれ異なった結論へと向かっていくものなのである。いってみれば、数学の答えのように答えは一つ、というわけにはいかないのである。

従って、先にも述べたように、『聖書』を基本とすることに加えて、（もちろん旧約・新約を含む）その書物に描かれている中で、「義」や「信仰」にあてはまる箇所を多く取り上げ、それがどう扱われ、考えられているのか、また、「義」や「信仰」とあわせて私の考えを述べたい。加えて、私の場合、何十年も研究しているわけではないので、多少、解釈が間違っているかもしれないが、そこはご了承願いたい。

また、

「聖書はあくまで神の義を基準にしている。言い換えると、聖書はその全巻を通して、神

の義をあらわし、その関連で種々なる出来事の歴史を記録したとも言えよう。⁽⁴⁾ といふくらいに、『聖書』は膨大である。私が扱う「義」はまさに『聖書』そのもの、神の言葉なのである。それゆえ、前述したように間違っただけの解釈や考え方が出てくるかもしれない。しかし、そのほうが面白いのではないだろうか。思想やものの考え方というのは、十人十色、三者三様であって然るべきなのである。そういうわけで、私なりの「義」と「信仰」を述べたい。また、自分なりの図解も付け加えていくつもりである。

「義」というのは、私の中では『聖書』を含めた場合と、そうでない場合とで解釈が違ふ。それは意識と無意識という区別と似ている。これらのことは、抽象的なことであるので、前述したように決まった一つの答えは出しにくいものである。(確かに科学的に研究することも難しい分野なのであろうが、ちょうど数学の問題を解いたら絶対にこの答え以外にない!というのと似ていると考えられる。そういう意味では数学も科学から枝分かれしてできたものだから当然だが。)つまり、「義」というものにも「これが義です!」と言い切れるものは何もないと思われる。

難しい概念ではあるが、「義」には『聖書』を意識して考える「義」と、一般的な無意識的に考える「義」というものがあると思われる。しかも、一人一人違う考え方を持っているということも忘れないでおきたい。

私の「義」論は、基本的には『聖書』の「義」を含む場合と、そうでない場合とで異なるのではないかと述べた。それは、『聖書』における「義」とは『聖書』そのものが「義」であり、それをベースとしてキリスト教が構成されているところからもわかるとおり、『聖書』に「義」が見られ、その内容全てに「義」が貫かれている。そしてその教えを信じ、即ち神を信じ、守り、日々の生活にあてはめていく。これが、キリスト教を信じる人間としての、生きがいになるのである。

ここで、それにプラスされることがある。「信仰」だ。『聖書』を読み、信じ、教えを守り、神を信じること。これが「信仰」なのである。一個人としての「信仰」とは、この場合、『聖書』を仲立ちとして生まれてくるものなのである。

次に無意識的に考える「義」、つまり『聖書』は除外する場合の「義」だが、これは単純であるようで実は、前項よりも答えが出しにくいものなのである。それは、『聖書』というものがあるかないかという違いで生まれてくることなのだが、一人の人間の「義」や「信仰」は、一人一人にとって違うものである。

私の場合は、犯罪をしないことや、道徳的に反した行いをしないことなどのような小学生の頃やもっと前の幼い頃に親から教えられたことなどが「義」の内容であると考えている。つまりこれは親や学校の先生が教えたことが「義」になる。しかし、そこに「信仰」は加わらない。(そう言うと、親の言うことは聞かない人間ということになるかもしれないが。)

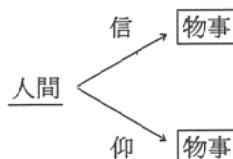
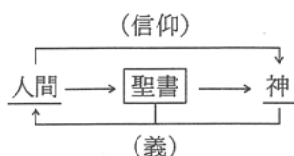
つまり、「義」と「信仰」を考える場合は、何を基準に置くかで変わってくるのだ、ということである。これは科学的に結論を出すことが難しい概念であるが故に、三者三様な解釈が生まれてくるのだろう。だから、それがキリスト教だけでなく、いろいろな宗教が生まれてくる原因となっている気がするのである。

また、宗教だけが「信仰」の対象になるとは限らない。何かにすがりたいとか、愛したいとか、好きだ、なども「信仰」なのではないだろうか。そうして人が集まり、共同体を成し、協力し、助け合って人間が生きていくのではないだろうか。

「義」と「信仰」は、こうである、と結論が出しにくいものだが、自分がある「もの」や「こと」に「義」を感じることで「信仰」が生まれてくるのだらうと思われる。

〈『聖書』を含む場合の「義」と「信仰」〉

〈『聖書』を含まない場合〉



※個別な物事が必ずしも「義」とはならない。

第1章 「義」とは

『聖書』には旧約と新約とがあり、前述したように『聖書』全巻を通して「義」を称えているということからも、「義」を論じる場合には、それが『聖書』そのものである、と言い切れないこともなくはないが、旧約と新約に分けられているとおり、それぞれの「義」にもそれぞれの特色がある。

まず、大まかな「義」の意味だが、単純に「正しい」ということではない。それは、

「倫理的意味での個人的な正しさや、社会的な正義を越えることである。正しいというとき、それが何に対して正しいか、何にかなっているかという基準が問題になるが、聖書はあくまで神の義を基準にしている。」⁽²⁾

というのである。『聖書』そのものが「義」であるということは、『聖書』の内容について理解しなければならない。

最初に、旧約聖書から取り上げると、神は「義」なる神であり、またその「義」を全うされ、「神が義である」という箇所がある。それは、

「主は岩、その御業は完全でその道はことごとく正しい。真実の神で偽りなく正しくて真つすぐな方。」(申32：4)

「主よ、あなたは正しく、あなたの裁きはまっすぐです。」(詩119：137)

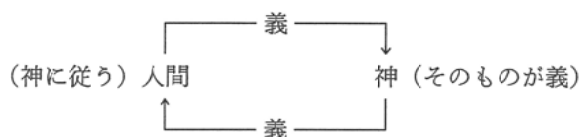
「意見を交わし、それを述べ、示せ。だれがこのことを昔から知らせ以前から述べていたかを。それは主であるわたしではないか。わたしをおいて神はない。正しい神、救いを与える神はわたしのほかにはない。」(イザ45：21)

「主はその悪を見張っておられそれをわたしたちの上に下されました。わたしたちの主なる神のなさることは全て正しく、それに対して、わたしたちは御声に聞き従いませんでした。」(ダニ9：14)

とあるように、神は正しく、常に人間に対して距離を置き、自分の立てた約束に誠実であり誤りがなく、法を破ったりはしない、というほど、まさに完全なのである。旧約聖書において、「義」は神と人間の間とに成立した一種の信頼関係で結ばれているのである。

つまり、神は「義」であり、人間は神を信じ、敬い、恐れることで、神に対して人間の「義」が向かっていくのである。

※神と人間との信頼関係



しかし、人間は神の前であってその意志を信じ、戒めに従うべきところを、それに背き「不義」を行ったのである。これについては「裁きを苦よもぎに変え正しいことを地に投げ捨てる者よ。」(アモ5:7)や「お前たちの咎がどれほど多いかその罪がどれほど重いか、わたしは知っている。お前たちは正しいものに敵対し、賄賂を取り町の門で貧しいものの訴えを退けている。」(アモ5:12)とあるように人間は「不義」=罪を犯したのである。人間が「不義」を行ったが故に、レビ記17~26章(神聖法集)にみられる法が、神によって示されねばならなくなったのだ。神は人の「不義」に対して対して預言者を通し警告を発せられ、悔い改めを迫り、さらに裁きを行われた。これについては、

「主は争うために構え、民を裁くために立たれる。主は裁きに臨まれる民の長老、支配者らに対して『お前たちはわたしのぶどう畑を食い尽くし貧しいものから奪って家を満たした。』」(イザ3:13~14)

「災いだ、偽りの判決を下す者、労苦を負わせる宣告文を記す者は。彼らは弱い者の訴えを退けわたしの民の貧しいものから権利を奪いやもめを餌食とし、みなしごを略奪する。刑罰の日に向かって襲ってくる嵐に対してお前たちはどうするつもりか。だれに助けを求めて逃れるつもりか。どこにお前たちは栄光を託そうとするのか。捕らわれ人としてかがみ殺された者となって倒れるだけではないか。しかしなお、主の怒りはやまず御手は伸ばされたままだ。」(イザ10:1~4)

「お前たちは弱いものを踏みつけ彼らから穀物の貢納を取り立てるゆえ切り石の家を建ててもそこに住むことはできない。見事なぶどう畑を作ってもその酒を飲むことはできない。」(アモ5:11)

などが挙げられ、ミカ書(2:1~3)にも同様の記述がある。

これらの一連の記述を総括すると、神の「義」を無視し、人間が勝手に好き放題振る舞い、悪事の数々を行っていることばかりである。ところが、神は全てお見通しであり、それでも神は警告して、悔い改めを迫っている。これには神の愛情が感じられるのである。それでもやはり人間は愚かなのだろう。神の「義」を神が示されても人間はそれを守るどころか、ますますエスカレートさせていくばかりなのである。

そして、神の「義」はやがて裁きにおいてあらわされることとなり、「義」なる神は「不義」なる人間に対して厳しい審判者として立ち向かわれた。神は「義」であるが故に、罪人に対して裁きを行い死に至らせるほどであった。「彼らは、このようなことを行う者が死に値するという神の定めを知っていながら、自分でそれを行うだけではなく、他人の同じ行為をも是認しています。」(ロマ1:32)

神の「義」がこのように裁きとなって示されても、神は「義」の故にイエス=キリストを賜わるほど、「不義」なる人間を愛し、救いの道をお示しになられたのである。ここにおいても神が「義」であるが故の愛情の結果が示されているのである。

即ち、パウロがローマの信徒への手紙3：20において「律法を実行することによって誰一人神の前で義とされないからです。律法によっては罪の自覚しか生じないのです」と説いているように、神の「義」に応えるために与えられた律法を誰も守らないようでは、人間は墮落していく一方である。それ故、神がイエス＝キリストを身代わりとされ、十字架にかけ人の罪を贖われたのである。

こうして神は律法とは別の形で、イエス＝キリストによって人間の赦し、信じるものを「義」とするいわゆる〈信仰による義〉を与えられたのである。

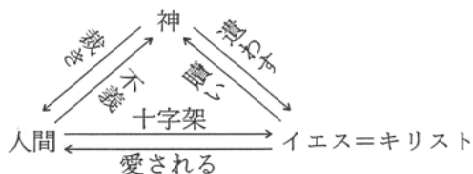
これに関しては、ローマの信徒への手紙3：21～26でパウロが明らかにしているとおりでである。

「ところが今や、律法とは関係なく、しかも律法と預言者によって立証されて、神の義が示されました。すなわち、イエス＝キリストを信じることにより、信じる者全てに与えられる神の義です。そこには何の差別もありません。人は皆、罪を犯して神の栄光を受けられなくなっていますが、ただキリスト＝イエスによるあがないの業を通して神の恵みにより無償で義とされるのです。神はこのキリストを立て、その血によって信じる者のために罪を償う供え物となさいました。それは、今まで人が犯した罪を見逃して、神の義をお示しになるためです。このように神は忍耐してこられたが、今この時に義を示されたのは御自分が正しい方であることを明らかにし、イエスを信じるものを義となさるためです。」



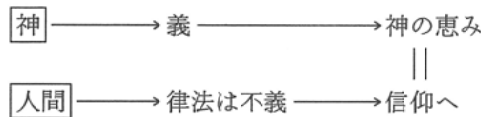
つまり、旧約聖書でも、神は人を助け導く「義」とする救い主であった。これは前述したイザヤ書45：21を参照されたい。しかし、人間の「不義」の結果、神の「義」は裁きとして示されていた。

しかし、新約聖書においてはキリストの十字架による贖いによって、神の「義」は救いの恵みとなって現わされた。「律法はモーセを通して与えられたが、恵みと真理はイエス＝キリストを通して現れたからである。」(ヨハ1：17)「福音には神の義が啓示されていますが、それは、はじめから終わりまで信仰を通して実現されるのです。」(ロマ1：17)「わたしは、神の恵みを無にはしません。もし、人が律法のお陰で義とされるとすれば、それこそ、キリストの死は無意味になってしまいます。」(ガラ2：21)



別の視点で考えれば、パウロの〈信仰による義〉がある。これは、人は律法によって、あるいは律法を守って「義」とはされない。もしそうなら、神の前に一人も完全に律法を守ってはいない（ガラテヤの信徒への手紙3：11参照）。ただキリストの十字架の贖いによる恵みを信じるだけで「義」とされるのである。パウロはこのような信仰によって「義」とされる〈信仰による義〉を強調する。「なぜなら、わたしたちは、人が義とされるのは律法の行いによるのではなく、信仰によると考えるからです。」（ロマ3：28）

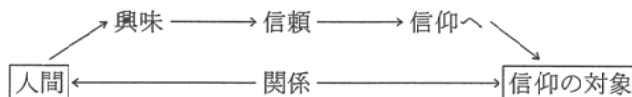
つまり、「わたしには律法から生じる自分の義ではなく、キリストへの信仰による義、信仰に基づいて神から与えられる義があります。」（フィリ3：9。同様にロマ1：17や2：20も参照されたい。）とあるように、人が「義」とされること、正しいとされることはただ一つである。神の恵みを信じること、つまりは「信仰」だけである。「信仰」とは逆に考えると、神の恵みを賜わるということにもなるわけである。



第2章 「信仰」とは

『聖書』における「信仰」とは、まさに神、イエス＝キリストへの信頼である。前述したパウロの律法による「義」ではなく、神の恵みを信じる「信仰」によってのみ人は神の前で「義」とされる〈信仰による義〉にも見られるように、神やイエス＝キリストを信じ、信頼し、「信仰」することが一番の重要なのだ。ここで注意したいのは、「信仰」と「信頼」という言葉の違いである。ここで細かい違いを述べると話がそれていきそうなのでここでは避けるが、しかし、基本的には同じ内容だといってもよいだろうと考える。つまり、「信頼」と「信仰」は、同時に発生したと私には考えられるからである。

「信仰」とは、人間が何かに対して信じるという、信じることへの対象がなければならない。しかし、その対象が何であれ、人間は少なくとも興味を持ち、その過程を経て「信仰」となっていくのである。だから「信頼」なくして「信仰」は生まれないのである。興味が「信頼」となり、そこから「信仰」へと変化していくのである。種々の事情により発生する順序は異なるだろうが、より日常的に使われる場合は「信頼」という方が適しているように思われる。しかし、本論の場合ように、宗教的に使う場合は、「信仰」という方が適しているのではないかと思われる。



前章では、神の「義」の性格が、変遷していく過程を『聖書』を通して読み取ってきたが、その結果、「信仰」という概念も出てきたこともあわせて見てきた。しかし「信仰」という概念は、神への「信仰」という観点から考えた場合、旧約聖書からも読み取れるのである。それ

が典型的に見られるのは、アブラハムである。それでは、アブラハムの「義」と「信仰」について、要点を述べたいと思う。

彼は「イスラエルの信仰の父と仰がれる人」といわれるくらい神への「信仰」が絶大であった。創世記では、彼は最初アブラムという名前だったが、のちに神に選ばれ選民の契約を結ぶものとされた時アブラハム（国民の父）と改名された（創世記17：5）。また彼の父はテラという名前で、アブラハム（この時はまだアブラム）はカルデアのウルとというところで生まれたが、そこからメソポタミヤのハランへ移った。テラはこのハランで亡くなるが、アブラハムはこの地で神と出会い、使命を与えられる。これに関しては、創世記12：1～3に記されているのだが、神はアブラハムに、神ご自身の言葉を伝えられたのである。これは同時にアブラハムが神に選ばれたことを示すことでもある。

そして彼は神の示しに従いカナン之地へと移る。カナンへ入ってから神に従い「アブラハムの生涯は175年であった。」（創25：7）とあるように、その生涯を全て、神との会話、交流で送った。（これ以上は創世記11：25～25：10により詳しく記されているのでそちらを参照されたい。）ただ全体を通して言えることは、（アブラハムに関して史実か否かを述べる気はないが）アブラハムはある意味では、預言者という立場ではあるけれど、当然ながら神の御心を当時の人々に告げながらも、預言者というよりも、もはや生ける神のようであり、アブラハムの人間像は全く見えないように感じられるのである。

また、前章で述べた「義」に当てはめても考えられるであろう。つまりこうである。神は「義」であるので、それについては疑う余地もないのだが、アブラハムを選民とされることも即ち、「義」なのである。神は「義」であるが故にアブラハムを選ばれた。そしてアブラハムも神に応えるために「義」を全うした。また、ここでいうアブラハムの「義」は神への「信仰」でもある。神の「義」とアブラハムの「義」、即ち「信仰」はそれぞれが結びついて、信頼関係が出来上がるのである。

またこの場合、「信仰」という概念は、「義」から生まれたものであると考えられるのである。というのは、そのものそれ自身が「義」である神を信じ、「信仰」し、信頼するということは、成り行きからいって当然なことだからである。もちろん、信じなければ（「信仰」しなければ）、当たり前だが、信頼関係は生まれるはずがない。そうすれば、創世記におけるアブラハムの言動の重要さも自ずから理解できるはずである。

旧約聖書における「信仰」とは「義」という概念を合わせ持ったものよりも大きな意味を持つのである。しかし、この「信仰」をイスラエルの人々は、神の信実に応えず、神への信頼を怠ったのである。これはアモス書の4：6～11に述べられているが、要約すると、神は農作物をはじめ水などの人間に必要な資源を支配（統括）し、民へ回心、悔い改めを迫られたのだが、イスラエルの人々は、頑なに神を信頼せず、反抗しているのである。これに対して神は、お怒りになったのである。

それゆえ神は、イエス＝キリストを遣わされ、イエス＝キリスト自身あるいは、イエス＝キリストに関することを「信仰」の対象とされ示される。ここに新約聖書における「信仰」のすべてが凝縮されているのである。

ここで、新約聖書における「信仰」を見ていくことにする。ここでは、イエス＝キリストが登場するわけであるが、ご存じの通り、彼は十字架に架けられて処刑されてしまう。私は、前段階において、人間が「不義」をはたらき、「信仰」も怠ったことに対して、神がイエス＝

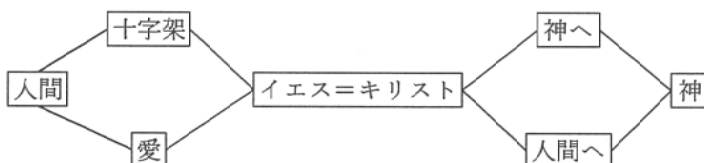
キリストを遣わされたのに、結果として殺してしまうとは、一体どういうことなのだろうか、と疑問に思ったものである。それでどうしてキリスト教が生まれるくらいになったのだろうか、と。しかし、これについては、本文化論演習Ⅱにおいて学習したので謎が解けたわけだが、それを通して神とは本当に人間を愛しておられるのだと思った。これは、まさに神の愛情に他ならない。神が「義」を示されても人間はそれを守るところか、神をも信じない。ならばと、イエス＝キリストを十字架に架けるという凄まじいやり方をも辞されなかったのである。これを行われることで、人間の背信行為による罪を救うために、イエス＝キリストが十字架に架けられ、また復活されることで神の意志を完全にあらわされたのである。この十字架に示された神の真実、あるいは神の愛を信頼し、受け入れることが「信仰」とされたのである。

これについてペテロは使徒言行録の中で次のように言っている。

「イスラエルの人たち、これから話すことを聞いてください。ナザレの人イエスこそ、神から遣わされた方です。神は、イエスを通してあなたがたの間で行われた奇跡と、不思議な業と、しるしとによって、そのことをあなたがたに証明なさいました。あなたがた自身が既に知っているとおります。このイエスを神は、お定めになった計画によりあらかじめご存じのうえで、あなたがたに引き渡されたのですが、あなたがたは律法を知らないものたちの手を借りて、十字架に付けて殺してしまったのです。しかし、神はこのイエスを死の苦しみから解放して、復活させられました。」(使2：22～24)

このようにペテロは説教しているが、これはペテロの口を通した神の言葉であろう。後になってそうだったのか、と私も考えさせられた。まさに「全ては神のみぞ知る」なのである。

これらのことでも分かるとおり、「信仰」が生まれる経緯が明らかになったと共に、人間が神の前で「義」とされるのは、これを受け入れて「信仰」することに他ならないのである。



旧約聖書と新約聖書を中心にそれぞれの「信仰」を見てきたが、結論は、本章の冒頭にも述べたとおり、神とイエス＝キリストに対しての「信仰」であった。

ここでまとめてみると、イエス＝キリストが登場する以前の旧約聖書の段階では、アブラハムにおいて見てきたように、彼の神への絶大なる「信仰」のお陰で、人々も彼によってしっかりと導かれていたし、ましてアブラハムを十字架に架けるなどということはしていない。しかし、イエス＝キリストは十字架に架けられたのである。

この差はいかなるものなのか。「信仰」を考えるうえで、アブラハムとイエス＝キリストの時代ではそれぞれの「信仰」観に違いがあるようである。

それは、アブラハムの場合には、彼自身の神への「信仰」観が大きくあり、また同時に言わば律法を仲立ちとして神との信頼関係を結んでいた、ということである。

これに対してイエス＝キリストの場合だが、彼は、律法学者（ファリサイ派やサドカイ派ら）や、祭司長たちに代表されるいわゆる「法律家」の人々をことごとく非難し、またそのせいで

何度か殺されそうにもなっているが、彼らに敵対視され、結局は、十字架刑に処せられてしまうのである。

それともう一つは、前述したペテロの説教のところで出てきた「奇跡と、不思議な業とするし」である。これに関しては全くといっていいくらい、はっきりいって説明は困難である。これが史実かどうかというのならいろいろと述べることはできようが、本論ではスペースの関係上ここでは述べないことにする。(そうでないと、『聖書』の内容が全て史実か否かを述べなければいけないので)

つまり、これだけ現代の科学が発展していようと、イエス＝キリストが行ったといわれていることは、未だ解明されず、史実だ！いや、虚構だ！と論争するにとどまっているのである。従って、現代の私たちにも不可解なことは当時の人々にも同じことなのではないだろうか。だから、律法学者たちや祭司長たちにとっては、やはり同様にイエス＝キリストの言動全てが理解できなかった、と思われるのである。(これは少なくとも『聖書』から読み取れる範囲での考えであるが)

また、別の視点から考えることもできる。それは、神が律法を知らない者たちにイエス＝キリストを殺させた、という結果を知らないとして理解に苦しむ状況があったことにも言及したい。

これも同様に史実か否かで論争がありそうなのだが、『聖書』の記述に従えば、これも史実ということになるだろう。ただ、非常に魅力的に考えるなら、この結果があるから「義」や「信仰」、そしてキリスト教が存在しているのだろうと考えられるのである。

こうしてみると、「信仰」という概念は、「義」同様、難解ではあるがこれが果たす役割は非常に大きいということが分かるのである。

つまり、本当に「信じる(信仰)者は救われる」のである。

第3章 「義」と「信仰」の接点(総括)

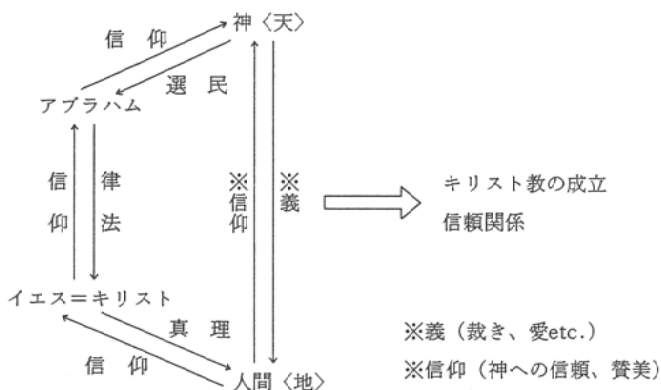
第1章において「義」、第2章において「信仰」をそれぞれ『聖書』を中心に述べてきた。『聖書』は文字どおりキリスト教を語るうえでは必要不可欠なものであり、キリスト教の最高法典であることはもはや言わずもがなである。

ここではこれら二つの概念を総括するという意味で、これらに果たして接点があるのかどうかということに着目していこうと考えている。

これまで私は自分なりに考えた図解を用いながら「義」や「信仰」を述べてきたわけだが、この図解のおかげで少々面白い結果が導き出されたのである。

それは次の総括的な図解が明らかにしているのである。

この図解は、「義」と「信仰」の接点を表しているものである。即ち、この図解から考えられることはこの二つの概念は



互いに同じ概念だとは思われないのであるが、図で示すと一つの相関図になっているということである。

結論として、この図解からこれら二つの概念に接点が存在していることが分かった。

『聖書』はその全巻を通して、神が存在し、その神を中心とした「義」が示されており同様に「信仰」の必要性も説いている。神がなされることや人間に対して起こる様々な自然現象を含め、全てを統括しておられる神は「義」そのものである。そして神は、人間に対して神の正しい教える御心を、律法を通して預言者に託された。それを信じ、忠実に行ったのが旧約聖書を中心に見た時に登場したアブラハムであった。

彼は自分の子供を神の前に贖いの供え物とすることさえも拒まず、神へ微塵の疑いも持たずに一新に神への「信仰」を持ち、神との間において信頼関係（『聖書』のなかでは契約関係といえるだろう）を保ち続けた。アブラハムに見られるように神の声を聞くことができ、また使命を受ける（いわゆる預言者）という選民となることも、神が「義」でありまた「義」であるが故の結果なのである。なぜ選ばれるのかなぜアブラハムなのか、ということに関しては触れなかったが、（というより『聖書』にはこういう類の記事は皆無）これはいわゆる「神のみぞ知る」ということなのだろう。もし、あえて答えを出すならば、神が「義」だからとしか言いようがないのではないだろうか。

アブラハムに示されたかたちで現われた「義」であったが、人間はそれを守らず「不義」を行った。これにより神は、裁きを示されることで人間に対し悔い改めを迫られる。つまり「不義」を行うものは悪いものだとして示されたのである。（私も幼い時など悪いことをすると親に叱られたものだがそれと同様であろう）「義」を示されて守らないのなら、「不義」に対してはこうだ、と神が自ら「義」であることを誇示されているのである。

このように裁きを示される神がおられても、人間は神に反抗していたのである。

そして新約聖書の時代へと向かい、イエス＝キリストが登場するわけである。彼はいろいろな福音書で論じられているとおり、たくさんの奇跡や不思議な業、しるしを行った。これも文化論演習Ⅱで学んだ『イエスの裁判』同様、史実か否かということに関しては、非常に難解であり、今ここで、史実だ！や虚構だ！とは言いきれないし、決して言えないことである。

しかし、より彼に対してラディカルだったのが、律法学者や祭司長たちであったし、彼のことを信じなかった一般民衆もいたことも同様、彼らは結局イエス＝キリストを十字架に架けて殺してしまうのである。これも「不義」の一つに十分挙げられるだろう。

また「信仰」という概念も付け加える必要があるだろう。つまり、旧約聖書は「義」と「不義」との間に神が入っておられ、裁きを行うことで人間との関係を保たれた。しかしこの「義」の中には「信仰」も含まれているのである。アブラハムは、ただいたずらに神の「義」を守っていたのではなくて「信仰」が根底にあって「義」を全うしていたのである。そういう点でも「義」と「信仰」は結びつくのである。

ではイエス＝キリストの時代はどうだろうか。彼の登場までは律法を守ることが神の前において「義」となっていたが、その律法もイエス＝キリストを処刑するくらいに、その律法自体が乱れていたのである。そして人間はイエス＝キリストが神から遣わされ、自分たちの罪を自ら背負われ、十字架に架かり亡くなられたのだ、とようやく悟る。そしてのちにペテロやパウロらにより、「信仰」というものの尊さと大切さが確立されていくわけである。

パウロが言っているように、律法により神を信じ、神の前で正しいとされてきたことは間違

いである。なぜなら彼は加えて、誰も律法など守らないし、律法だけで人間は神の前で「義」とはならないのである。そうではなくて、〈信仰による義〉だけなのであると彼は強調する。イエス＝キリストはなぜ神の子として遣わされたのか考えねばならないだろう。それはすなわち、神が「義」であり、イエス＝キリストを、神を「信仰」することの証明にもなるからである。キリスト教という一つの宗教、いやもっと言えば世界三大宗教と言われる以上の大きな力をもっているのだと改めて感じざるを得ない。

序章でも述べたがキリスト教というものは非常に難しい。「義」だけでもそれそのものの概念を説明するだけでも難しい。加えて「義」や「信仰」とはいえ、これらは言葉では表現されているが、説明するのはこれがなかなか大変なのである。例えば、『聖書』における場合には以上のような論文になるが、違う方法で説明しようとするとは解釈が異なるものなのである。

これらを総括してみると二つの概念には、切っても切れない強い絆があることが分かった。「義」と「信仰」はキリスト教を構成するうえでのいわばスパイスのようなものではないだろうか。スパイスにもいろいろあるように私は私なりのスパイスを用いて、「義」や「信仰」というスパイスで料理してきたのである。例えばルターやカルヴァンにみられる宗教改革もその一つなのではないだろうか。私はこの論文で「信仰」を扱ううえで、彼らの思想は取り入れなかった。それは、それが正しいとか間違っているという評価よりも、自分なりの主張を大切にしたいからである。従って、ルターはルターの、カルヴァンはカルヴァンの私は私の「義」や「信仰」あるいは宗教観というものがあって当然なのではないだろうか。私がどう思うか、どう考えるかが大切なのであって、それを批判的にあるいは肯定的に考えることもあるだろう。それはそれでまた新たな思想や考えが現われると私は考えるのである。

第4章 現代における「義」と「信仰」－多種多様な現代の中で－

本章では、「義」と「信仰」を『聖書』、キリスト教という観点からの考えを、現代の社会やもっと視野を転じて世界をみた場合で、どういう関係があるのか、またどういう役割があるのかなどを考えていきたいと思う。

私は、第1章から第3章を通してキリスト教の観点から『聖書』を中心に、「義」と「信仰」を捉えてきたが、本章では、キリスト教的な側面だけに限定することをせず、むしろ広い視野にたって「義」や「信仰」をあてはめて考えていこうとも思う。

現代は、多種多様な人々が生き、ものやお金がめまぐるしく動き、今、まさにこの瞬間にも現代という社会や世界が動いているのである。また、様々な宗教や思想も存在し、世界各地で、また我々の日本でも様々なことが起こっているのである。その証拠にここ最近のニュースをみれば一目瞭然である。

例えば、神戸の少年の事件、相次ぐ銀行や証券会社の倒産、また京都で開催された環境会議など良いものや悪いものを含めても挙げればキリがない。特に神戸の事件や金融業界に関する事件は連日報道され、今までの我々のなかではとても信じられないとしか言いようのないことの連続であった。そういう意味では、学校関係でもみられる、いわゆる女子高生の援助交際もあてはまるだろう。これなどは、単なる流行語ではなくて、最近では新潟でも発見されているというのであるから驚きである。これからは一体どういうことなのであろうか。何がそうさせるのであろうか。私も人間だが、本当に人間の考えることは分からないものである。

まさに世も末なのだろうか。しかし、こうやって時代のせいにして片付けても良いのだろうか

か。私はいけないと思う。もっと人間一人一人がしっかりとした意識を持ち、何が正しい（「義」）のか、また何が間違い（「不義」）なのかを見極めて生きていかなければいけないのではないだろうか。

だが、それができていないから前述したような一連のとんでもない事件が起こったりもするのだろう。しかしこれら全てに「義」と「信仰」をからめて考えていくと、まさしくキリがないので、最近私のまわりで盛んにクローズアップされている環境問題を取り上げてみようと思う。

文化論演習Ⅱの授業の初めで、毎回、新聞記事からの討論の時間をもった。そこでは環境に関する記事を取り上げて、私たちはたくさん討論を重ねてきたこともあって、非常に環境について興味を持ったし、同時に他人事ではないという意識が芽生え始めたのである。

またマスコミも盛んに報道している。マスコミの果たす役割は、良くも悪くも大きいのだが、私は「現代の流行語にならなければいいな」と考えている。なぜなら流行というのは流行り廃りの連続である。環境という問題が、流行だけで終わってしまうのではないかと非常に心配である。そうならないように私たちは、環境について真剣に取り組んでいかなければならないのである。

さて、この環境だがゼミのメンバーのそれぞれの意見も聞き、また私自身もそう感じているのだが、非常に難しい問題であると思う。これは、地球規模において人類が協力し、実践していかなければいけないくらい深刻な問題なのである。

例えば、私も使用している自動車を例に挙げると、これは非常に便利であり、また、現代において必要不可欠なものである。しかし、この自動車が厄介なのである。当たり前だが、自動車はガソリンで走り、排気ガスを出すものである。この排気ガスが問題なのだ。これが地球を温暖化させる原因として問題となっているのである。地球が温暖化すると、南極や北極の氷が解け海面が上昇し、世界は水浸しになってしまう。あるいは、排気ガスのせいで大気が汚染され、私たち生き物の生態系をも狂わせてしまう。それだけではない。森林が枯れ、川や海の水が汚れ田や畑などの農作物にも影響を与えてしまうのである。まさに衣食住に影響が出てしまい、地球が危うくなってしまうのである。そんなことから最近では、ガソリン以外で走る自動車を開発するメーカーが続々と登場させようと努力している。これは画期的なことであるので、期待していいだろう。

このように自動車の排気ガス一つで環境が破壊されていると思うとたいへんなことであると感じている。しかし前述したように自動車がなければやはり困るのは必至である。他にもいろいろあるが私たちの生活に必要なもの（冷蔵庫、クーラー、ストーブなど）の多くは環境を破壊するための原因となっているのである。これら一連のことを総括すると、便利なものである反面、地球を破壊するという代償も付け加わるのだと感じざるを得ない。これは「義」なのかそれとも「不義」なのか、難しい問題である。

タイムリーな話題では、今年の12月1日に京都で環境会議が開かれた。どうして京都でなのか、なぜ日本でなのか、とも思ったが、日本が議長国ということで世界のなかでリーダーシップを取ろうというねらいもあったようだ。だが、結局はリーダーシップを取ることでうまくいかなかったという内容の記事を使い、本ゼミでも討論したとおりである。政府間や国家間レベルでもなかなかうまくまとめられない難しい問題なのである。これは環境が世界の国々で話し合わなければいけないくらい関心が高まっている証拠であろう。これはものすごい進歩である

う。一昔前にはこんなことがはたして盛んであったらどうか。なぜ、今頃になって気が付き始めたのだろうか。

いろいろ考えられるだろうが、これを引き付ける力があるとすれば、それは時代だと考えられる。それは前述したように今はまさに世紀末であるからだ。世の中の様々な事件や出来事が起こることは、ただ単に人間がどうこうという問題ではなく、何か不思議な力がいろいろな所に作用して起こる結果だと考えられる。何から何まで時代のせいにするのではないが、環境だけでも何が「義」で何が「不義」かも分からずに会議を開いても結局、砂上の楼閣ではないだろうか。世の中が間違っただけに進んではいないかと思うのは私だけであろうか。

人間は「不義」を働けば反省し、またそれによって感謝もする。そして、「信仰」も深めていくのである。これは非常に宗教的なことだが、世の中のいろいろな宗教を含めてたくさんの思想があるが、はたして人間はそういう考え方に立って、一人一人の人生を全うしているのだろうかと疑う。私が世の中が間違っただけに進んではいないかと示したのは、この点なのだ。つまり、自然を敬い、愛する気持ちがどれだけ今の私たちにあるだろうか。単純なことだがこういうことを実践している人は少ないだろう。それよりも日々の生活で精一杯でそんなことを考えている暇はないだろうから。

混沌とするこの世の中を生きることは実は非常に難しいことなのではないだろうか。一方で、誰が言ったか知らないが「飽食の時代」だそうである。何ということであろう。これではまるで、「義」や「不義」、「信仰」も何もあったものじゃない。こんな言葉があるくらいだから世の中は完全にマヒしているのではないだろうかと思う。現代の社会において「義」や「信仰」をあてはめることはできたが、正しさの感覚がマヒしている現代からは何ともいいようのない疲労感が残るだけというのが結論である。何が「義」で何が「不義」なのかをしっかりと見極めて、意識を改革し、しっかりと生きていかなければいけないのではないだろうか。

今、この時代を神が見ておられたら果たしてどうされるだろう。非常に恐ろしいことである。

終章 おわりに

「義」とは何か、「信仰」とは何か、これが私の論文のテーマであったが、最終的な結論は非常に難解であり、答えは出しにくいものであると言っておきたい。しかし、これらは実際の日常生活にあてはめて考えた場合（第4章）、多少、不安はあったが、宗教的な意味合いだけの言葉、あるいは概念だけではないことが分かった。つまり宗教は日常生活から生まれるものなのだ、ということも分かったのである。私たちが生活している世界（社会）では、必ず正しいことや間違っただけがある。その延長線上に法律を越えた力を持つ宗教が存在していると考えられるのである。そう考えると、人間にはおそらく法律や宗教が必要なのであろう。

「義」や「信仰」は神やイエス＝キリストに対して働くのである。我々人間は「信仰」し、敬い、祈り、自らを律するのである。それらが「義」であり、人間も神やイエス＝キリストの前で「義」とされ、「信仰」という概念も同時に生まれるのである。ここにおいて神・イエス＝キリストと人間との間に信頼関係ができ、お互いの力関係のバランスがキリスト教という宗教を生む原動力となっているのである。

この関係の根本を私が第4章で述べたように現代の世界（社会）が崩そうとしているのではないか、ということも述べた。

『聖書』をとおして神やイエス＝キリストの正しさや尊さが現していることを一人一人がど

う受けとめるかは自由だが、無神論者を除けば、世界には様々な宗教があり、それぞれに人間が属し、「信仰」をしている。また日本においても仏教があるように（それだけではないが）仏教にも仏様がおられ、正しいことや間違っただけを説いておられる。

宗教や端的に神にすがりたくなってしまうのは、人間が弱いからなのであろう。それで安らぎをどこかで得たいのであろう。結果的には「信仰」という概念も生まれているし、これらはキリスト教だけに限ったものではなく、あらゆる宗教に共通している。

人間には、「義」や「不義」も分からずに行動してしまう悪い癖があるから宗教が必要なのだ、という神の声が聞こえてきそうである。例えば現代でもそうだろう。宗教の他に法律があるが、法律を守る人間がどれだけいるだろうか。法律など作る必要がなければ良いのだから、これも、やはり必要な世の中だし、人間は弱いし、愚かだから作らざるを得ないのである。

ルカ福音書でイエス＝キリストが十字架に架けられている場面で、彼の他にも別の罪人がいたが、彼は罪人に「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです。」（ルカ23：34）と述べている箇所が、私には物凄く印象づけられるものがある。これに関しての史実性は問題にしないとしても、これこそがまさに人間の弱さ、愚かさの象徴であろう。加えて、これが神の愛であり、イエス＝キリストの愛なのだと痛感できないだろうか。私はクリスチャンではないが、神やイエス＝キリストを信じる一人の人間として、改めて人間の弱さ、愚かさを実感したような気がする。私は決して人を赦すことができないだろうに。

それだけではない。人間は妬み、執着し、善悪の区別も出来ず、好き放題している（私もそうである）。これは、おそらく『聖書』の時代よりもひどいような気がする。時代は世紀末。またノア方舟のように神がしるしを行われるのであろうか。考えると恐ろしいが。

私はこの論文を通して、神の存在も、『聖書』の中味についてもほぼ肯定的に論じてきた。それは、私自身の考えるところであるのでごく自然な形であった。むしろ否定的になるほうが私にとっておかしい気がするのである。これを機に私も「義」や「信仰」を大切に、また同時にこれらをしっかりと見極め、前をみて、人間らしく生きていかなければいけないと痛感した次第である。

註

- (1) 新教出版社編『聖書辞典』新教出版社、1996年、p.132。
- (2) 同書、p.132。

参考文献表

- 新教出版社編『聖書辞典』新教出版社、1996年
日本聖書協会『聖書 新共同約』三省堂、1987年
ジェームス・デニー 椿憲一郎訳『キリストの死—新約聖書 説教 神学における贖罪』新教出版社、1992年
ヨーゼフ・プリンツラー 大貫隆・善野硯之助訳『イエスの裁判』新教出版社、1988年
『閉幕した京都会議』朝日新聞1997年12月12日 朝刊、所収

(卒論指導教員 山田耕太)